

やまたらけ

YAMADARAKE

JUNE
No.35
2009

太陽に愛されて

「夏秋入口」。県道52号沿いにひっそりと立つこの看板から、細く曲がりくねった緑のトンネルを車で上って15分ほど。不意に目の前に集落が広がります。周囲をぐるりと山々に囲まれた、その集落の名前は夏秋（なつあけ）。一説には夏でも秋のように涼しいことから夏秋と呼ばれるそうですが、まさにそのとおりというような涼しい風が通っています。

笑顔が素敵な松永節子さんは、昭和28年に早川町内の角瀬（すみせ）からお嫁に来て以来、この土地で暮らしてきました。

「今朝も絹さやを採ってきてね。こらじゃ毎日、緑のしたたる野菜を食べてるの。」

山に囲まれた夏秋を、節子さんはパラポラアンテナのように光を集める地形だと言います。南向きの斜面は日当たりがよく、冬の野菜もよく育ちます。夜霧

朝霧がかかるのも、野菜がおいしく育つ秘訣だそう。節子さん手作りの

ヨモギ団子をほおばれば、口いっぱいに太陽の香りが広がります。

「おてんとぅさん」に近くて自然いっぱいなのが、夏秋の何よりの自慢です。（大久保実香）



お寺とお宮は 集落の人を表す



学定寺の境内で、集落の説明をしてくれる節子さん。ページ下の写真が、学定寺からの眺め。右は、散歩のときにいつも立ち寄る道祖神。



朝と夕方の2回、集落を散歩するのが節子さんの日課です。毎朝、緑の山々を見晴らせる場所に立って目をつむると、太陽の光でまぶたが赤くなるのを感じます。空気をふあーと胸いっぱい吸い込んで、歩き始めます。道祖神様にお参りをし、林道を炭焼き小屋まで歩き、急な坂道を登りきると学定寺にたどり着きます。お寺の庭には、町の天然記念物にもなっている、とても立派なイトザクラがあります。その木を眺めながら一休み。晴れていれば、南側に面したお寺の大きな窓に、周囲の山々がぐるりと映ります。お墓のご先祖様にも手を合わせ、そこからまた、急な坂道を登って、下つてと、集

落を一回りします。

1日2回のお散歩を欠かさない節子さんにとって、夏秋という集落全体が自分の分身のようなものです。「お寺とお宮は集落の人を表すでしょ。」ごみ一つない道路やよく手入れされた畑。数人が暮らすには大きすぎる集落が今も整然としているのは、暮らす人々の心意気があつてこそです。

あまーい、何とも 言えん匂いがしてねえ

節子さんがお嫁に来た頃、夏秋には10軒、75人もの人が暮らしていました。山に囲まれ、古くは炭焼きや養蚕で稼ぐ家が多かったそうです。「昔は炭を焼いて、にぎやかだったよ。山のあちこちから煙が立って、

あまーい、何とも言えん匂いがしてねえ。太陽が沈む時にはそのけむりがきらきら光って、きれいだったよ。」

風通しの良い気候も養蚕に適していて、良質な絹糸を年に4回とることができました。餌の桑の葉は近隣の集落から運んで来たり、山に桑を植えたりしてまかない、6軒が競い合うように蚕を育てました。蚕を飼わなくなった今でも、養蚕に使った二階には行き来ができるようにしてあります。普段は天井にしまつてある階段を下ろすと、遊びに来た孫たちは「忍者屋敷のようだ」と喜びます。他にも別棟の倉庫など、今も集落には蚕が飼われていたころの名残が残されています。

当時は、テレビもないので、キノイネさんなどと言って、月に2回、お題目を唱えて集落を回るのが楽



学定寺のイトザクラ





旦那さんが作った炭焼小屋。炭を焼く時は、町外に住んでいる子どもや孫にも声をかける。みんな、喜んでくれる。

しみでした。当番の家にみんなで集まり、時季の料理を囲みながら家同士の親睦を深めました。

お寺には何でも知っている尼僧さんがいて、その方からお花やお茶、お裁縫を習ったこともあります。青年団があった頃には、青年団員がお寺に宿泊りをして、そこに学校の先生やほかの集落の人が交流しに来ることもあったそうです。盆踊りなどの青年団活動も盛んで、春祭りや秋祭りでは甘酒やお菓子を作ってふるまいました。

急斜面での畑仕事には、初めて尽くしのこともありました。

「おてんとさま かじりおとすじゃ

ねーだ」

節子さんが嫁いで間もない頃、急な山畑で、力を込めて耕そうと大きく鍬を振りかぶっていたら、義理のお姉さんから言われた言葉です。太陽と節子さんとは、こんなところにも縁があるようです。

**あたりまえって思ってた
いればさみしくないの**

夏秋で育った子どもたちは立派に成長し、それぞれの道を歩み始めました。集落に残っていた人々も、7年ほど前から一人一人と亡くなったり、息子や娘のもとで暮らしたり

するようになり、一軒、また一軒と家の灯りが消えていきました。

「さみしくねえかって聞かれるよ。でもなんでもあたりまえって思っていたらさみしくないの」

背負子に炭と子どもを背負ったこと。子どもたちが桑を運ぶのを手伝ってくれたこと。家の窓から山々を眺めては、「ああ、あそこでご飯を食べたなあ」なんて思いを巡らせます。

「貧しかったかもしれないけど、心はさみしくなかったよ。遊び相手にも困らん。そういう時代が懐かしい。」



写真上：節子さんに話を聞く。机には手作りのヨモギ餅と柏餅。写真左中：節子さんが育てた緑のしたたる野菜。写真右下：二階へ続く折り畳み式の階段。写真左下：節子さんと旦那さんがもらった賞状がたくさん並ぶ。



いいとこ見つけて
住んでくれただから、
もったいないでしょ

多い時では81人の村の衆みんなを食わせてくれた夏秋を、節子さんは「尊い土地」と言いました。だからこそ、今も手入を欠かさない、大切な土地です。苦労の時代を通じてきた夏秋を出て行きたくはない、でも、一人になったら出ていかないといけないのだろうか、そんなことを考える時もあります。

水は蛇口をひねれば出るようになり、足で通った道は車で行き来できるようになりました。ここで暮らす人々にとって、夏秋は決して不便な土地ではありません。それにここでは、キノコを育てたり炭を焼いたり、フキやヨモギを採ってきたり、山に支えられた暮らしの中で何でもすることが出来ます。「こういうところに住むってことはいいよ」と、集落の人々は口々に言います。



連休になれば、いつもは暗い家にも明かりが灯ります。外で暮らす人も、時々戻ってきたり家の手入をし続けています。節子さんの家でも、炭焼きをする時には子どもや孫が集まって、当時のにぎやかさが戻ります。息子さんは、杉や檜ばかり植えては集落が暗くなると、花の木々



写真上：節子さんの畑。
写真中：孝行さん（右）は身延町の下山で田んぼをしている。そこに植える稲を夏秋で育てている。写真下：久さんは、週末に夏秋に戻り、父親が残したぶどう畑を手入れしている。



を植えてくれました。夏秋で育って左官屋となり、お寺の水道を作ってくれた人もいます。夏秋を大切に思っているのは、普段暮らしている人々だけではないのです。



写真上：若かりし頃の節子さん。左は旦那さんの陸雄さん。写真左上：息子さんが種をもらってきて植えた、イトザクラの幼木。



早川旬の直送便

お中元にも
使えます！

ご当地アイスの詰め合わせ 「ポポと雨畑茶のアイスクリームセット」

バナナとマンゴーを足したような味わいの、幻のフルーツ「ポポ」と、川霧が降りおいしいお茶ができる雨畑地区の特産品「雨畑茶」の粉を贅沢に使ったアイスクリームのセットです。

価格／通常価格1,800円、会員価格1,500円＋送料950円
内容／ポポアイス3個＋雨畑茶アイス3個
発送／お中元の場合：7月1日から注文順に発送
お中元でない場合：注文順に順次発送
締切／お中元の場合：7月13日(月)
お中元でない場合：随時受付



これがポポ



お中元にも
使えます！

山葡萄ワインを贅沢に使った 「ワインゼリー恋紫の詰め合わせ」

早川町特産の山ぶどうワイン「恋紫」を使って、夏に嬉しいゼリーを作りました。山ぶどうワインの風味がそのまま味わえる贅沢な一品です。贈答用にも喜ばれます。

価格／通常2,000円、
会員1,900円＋送料700円
内容／15個
発送／お中元の場合：7月1日から注文順に発送
お中元でない場合：注文順に順次発送
締切／お中元の場合：7月13日(月)
お中元でない場合：随時受付



早川町の新しい特産品 「千須和主導会の生食用ブルーベリー」

遊休農地を解消しようと、地元の方々が発起して植えたブルーベリーが、7年経って、ようやくおいしい実をつけるようになりました。甘みと酸味のバランスが絶妙。採れたてをお送りします。

価格／通常2,100円、会員1,800円＋送料950円
内容／500g
発送／7月上旬より注文順に発送
締切／8月10日(月)



100年以上続く伝統野菜 「茂倉うりの冷汁セット」

早川町茂倉(もぐら)集落で100年も前から自家採取されてきた茂倉うり。形はずんぐりむっくり、肉厚で柔らかくみずみずしいのが特徴です。茂倉では、暑い夏に「冷汁」にして、ご飯や麦飯にかけて食べるのが定番。その他にも、乱切りにして味噌とおかかをまぶした「みそっころがし」、からしマヨネーズ、おかかしょうゆで食べても最高です。毎年好評の冷汁セットを今年もご用意しました。

価格／通常1,800円、会員1,500円＋送料950円
内容／茂倉うり6本、えごま100g、味噌100g、青じそ・ネギ適量
発送／7月下旬から注文順に発送
締切／7月21日(火)



これが冷や汁！

千須和主導会では、ブルーベリーの摘み取りもやっています。早川町にお越しの際は、ぜひご利用下さい。詳細は、やまだらけ編集部までお問い合わせ下さい。

豪華賞品？が当たる やまだらけクイズ！13

問：今回特集した夏秋集落のように、早川町には読むのが難しい集落名がたくさんあります。さて夏秋と同じ本建地区にある「初鹿島」という集落。一体、何と読むでしょう。

答1、はつかしま
2、はじかしま
3、はづがしま

正解者の中から抽選で2名様に、千須和主導会のブルーベリージャムをプレゼントいたします！

前回のクイズの正解は、1の「考える葉」でした。抽選の結果、岩瀬さん(市川市)、栗原さん(甲州市)の2名が当選しました。おめでとうございます！

応募総数29票のうち、24票が正解でした。

■注文・お問い合わせ先

「やまだらけ編集部」

電話／0556-45-2101 (9:00～19:00) ファックス／0556-45-2268 (24時間対応) メール／shop@joryuken.net (24時間対応)

いずれも、注文者氏名、住所、電話番号、お送り先氏名、住所、電話番号、商品名、数量をご連絡下さい。ファックス、メールでお申込の場合、折り返しご連絡いたします。3日経っても連絡がない場合は、お手数ですが電話でお問合せください。支払い、商品と一緒に請求書をお送りしますので、指定の金融機関へお振込みください。※会員とは、早川サポーターズクラブ、及びNPO法人日本上流文化圏研究所の会員のことです。

差越く差越峠く身延町下山 大道（だいどう）

早川町の入り口付近、米無川（こめなしがわ）沿いには、兩岸に町道が2本延びている。左岸側を上れば、今回の特集の舞台、夏秋。そして、右岸側を車で10分ほど上ると、差越（さしこし）の集落である。

集落の脇には沢が流れており、吊り橋が架かっている。かつて夏秋に通じていた道の跡である。吊り橋を渡らず沢沿いに登ると、標高約580mの差越峠を越え、あじさい寺としても知られる妙見寺を経由して身延町下山（しもやま）に至る。現在の県道が通るまでは、早川入りと下山と

を結ぶ往還道だった。

差越の集落から峠に向けて少し歩くと、苔むした石垣がそこそこに見える。田んぼの跡だ。注意深く見ると、沢沿いには水路と思しき跡もある。山の中に、こんなにも田んぼが広がっていたということに驚いてしまう。

差越の子どもは下山の学校に通っていたこともあったという。戦前、本建の小学校には高等科がなかった。高等科を設置している学校まで通うには、塩之上にあった五箇小学校より下山の方がずっと近かった。そうだ。

道沿いには田んぼが並び、子どもが通学のために行き来する。大道はそんな風に日常的に使われる道だった。とはいえ、下山からやってきた花嫁行列が、途中でキツネに化かされて、山の中で宴会をしていた、という言い伝えも残っている。かつては人間の領域と自然の領域とがせめぎ合っていたのだろう。今はすっかり自然に押されて、踏み跡もほとんどない。妙見寺のしし威しの音が、僅かに、人間側の領域の主張に聞こえた。

①手入れが不十分のため、倒木があったりルートが分かりづらくなったりしているところがあります。



峠は木立の中。木々の間から富士川と下山の町並みが見下ろせる。



夏秋に通じる吊り橋。通行注意！



夏秋や初鹿島の人も、この辺りに水田を作っていたという。



妙見寺は、あじさい寺としても有名。国道52号線からは車で10分ほど。杉木立の中でしし威しの音だけが響いていた。



読者の声

●書道習っているの、興味深く読ませていただきました。「ささと墨を三往復～」というくだりに、実際に試してみたいなりました。普段は墨液を使っていますが、墨をるところから始めようと思わせてくれる特集でした。（甲府市Tさん）

●20年ほど前に義弟を介して雨畑硯を求めました。いまでも私の宝にしていますが、今号を読ませていただき、彫り続けて下さる玉泉さんに感謝です。後継者が生まれることを期待しています。ぐ～っと「やまだらけ」が身近になりました。（東京都Oさん）

編集部：この他にも、雨畑硯に関するお葉書をたくさん頂きました。5月24日に開催した雨畑硯のツアーも、少人数ながら盛り上がり、硯匠庵のスタッフ一同やる気をみなぎり

せております。早川町にお越しの際は、せ硯匠庵をお訪ね下さい。

●早川町に私と同じ氏があることを知りました。望月さんとか深沢さんという氏はよく目にしております。氏からみた早川町の歴史というような特集を組んでいただければ幸いです。（北名古屋市Oさん）

●（峠道を見て）静岡の人との交流があったのが興味深かったです。（南部町Sさん）

編集部：素晴らしいアイデアをありがとうございます。望月と深沢で早川町の5割を占めると言われていますが、中には一軒しかない珍しい姓もあったりするんですよ。また、静岡に行くと、よく望月姓の方に会いますが、「きっと早川町と縁があるに違いない」と思ってしまうのは私だけでしょうか。

NEXT やまだらけ

36号特集（8月上旬お届け）

「早川と電源開発の歴史」

早川町の歴史を大きく変えた電源開発。早川の急峻な地形と豊富な水量を活用し、大正時代から水力発電所の建設が始まりました。昭和30年代、町には1万人を超える人たちが暮らしていたといえます。

日本の近代化を支えた早川町の水力発電。開発の社会的背景や建設技術、そして賑わった町の様子などを、関わった町民の声も交えながら追います！

今号編集集中の5月24日、松永節子さんの夫、陸雄（のりお）さんが、山仕事での事故で亡くなりました。享年77歳でした。

取材中は、照れてなかなか表に出て来られませんでした。帰り際に玄関で手を振る節子さんに寄り添うようにして並び、温かい笑顔で見送って下さった姿が忘れられません。在りし日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

節子さんがご馳走してくださった、手作りのよもぎ団子のよもぎの味の濃いこと！！餅粕の香りのいいこと！！忘れられません。夏秋以外にも、早川町にはごく少数の世帯が暮らす集落がいくつかあります。そこで暮らす人も、外で暮らす人も、それぞれに集落を大切に思う気持ちを持ちながら、集落の今後を考えていることと思います。

山を覗けば宝の山
やまだらけ

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住所／山梨県南巨摩郡早川町栗袋430 〒409-2727
電話／0556-45-2160 ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/